

## 報徳博物館

友の会 だより  
No.5

鈴木藤三郎筆 放言居士出家之図 (大日本報徳社蔵)

日本製糖業のパイオニアである鈴木藤三郎（1855～1931）は、書画もよく描きました。彼は、青年時代に郷里の静岡県の森町報徳社で尊徳の思想と体験を学び、菓子製造の実際の経営に応用し、将来の大事業への展開の基礎を養いました。

上の絵は、藤三郎が45才のとき、岡田良一郎にあてた書簡（明治32年10月17日）に添えた3枚の絵の一つです。「放言居士出家之図享年六十五才」として、20年後の未来を想像しています。僧侶になった彼が、「報徳」と「禅学」と記した振り分け荷物を携えて、寺に赴く姿です。後方に観世音菩薩を乗せた大きな法螺貝を描き、それを綱で彼が引張っています。

藤三郎は、書簡の中で、実業界を引退した後に、私財で寺院を建立し、出家して報徳の道を説いて余生を送りたいと述べています。この寺は鉄骨でつくり、屋根は銅板張り、門扉は石造りの万世不朽の構造だとしていますが、この念願は実現できませんでした。

## 映画口ケ地紹介

二宮尊徳生誕200年記念映画の取材報告は、継続して掲載する予定です。今回は、尊徳の仕法が行なわれた栃木県茂木町を紹介し、現在の報徳運動にもふれたいと思います。



### ◆茂木町のあらまし

栃木県の南東部に位置する茂木町は、県境を走る八溝山系の山間地帯で、宇都宮市から31km、茨城県水戸市から36kmの地にある。東部・南部一帯は茨城県笠間市や七間村などに接し、北部は烏山町に、西部は益子町、市貝町に隣接する。東西12km、南北27km、総面積17.25kmの細長い町である。



地域産業と結びついた観光開発がすすみ、逆川地内の良質の陶土発見は、茂木焼の新産業となりつつある。人口は約2万人。(写真は茂木城址)

那珂川の急流が町の北部を流れ、町の南北を貫く逆川が茨城県境で合流している。

かつては、葉タバコの生産と養蚕業で有名。現在、

### ◆報徳と町づくり

尊徳の仕法地であった茂木は、昨年8月の台風10号による豪雨で甚大な被害を受けたが、町民の努力によって驚くほどの早さで復旧された。同年10月25・26日には、第17回全国報徳大会(全国報徳団体連絡協議会主催)が開かれ、当地の茂木報徳会が地域共同体に活力を与えてきた報告も行われた。報徳の精神は現在もこの町に息づいている。

### ◆大会参加者の能持院見学

10月26日(日)の早朝、大会参加者はバスで茂木町の名刹である、塩田山能持院を見学した。庭のたたずまいは静寂で、報徳仕法に縁の深い藩主細川氏や推進者の中村元順の墓がある。住職の説明もあって、多数の見学者に共鳴をあたえた。(写真は重文指定の室町時代の総門)



### ◆能持院

能持院は曹洞宗で、中世には茂木氏の、近世には細川氏の菩提寺である。藩祖の細川頼元を始めとする、歴代藩主の墓地になっている。

しかしながら、墓には碑はなく、杉の木を植えたその前に、法名・没年・月日を刻んだ石燈籠を一つずつ置くのみである。

天保5年(1834)、茂木藩主細川長門守興徳は、藩医中村元順(勸業衛)に密かに桜田陣屋の尊徳を訪ねさせ、仕法を依頼した。前年の領内大飢饉などのため、茂木藩の借財は13万両におよんでいた。尊徳の財政再建によって、弘化3年(1846)には借財3万7千両余に減じた、画期的な仕法となっている。





### ◆中村元順（勸農衛）

元順は、茂木の報徳仕法を尊徳から授かり、復興事業を推進した人物である。享和2年（1802）現在の真岡市に生まれ、20歳ごろから江戸で医術修業に励んでいた。尊徳の活躍については、同郷物井村（桜田）の岸右衛門から、度々聞いて感動し



ていたようである。

元順は帰俗して勸農衛と改名し、茂木藩の復興事業の推進者になった。藩財政の分度（限度）をたてるほか、藩士の儉約令や農民への教諭の準備をして、復興事業に取り組み成果をあげた。

### ◆源吾の堰

国道123号線の飯野に近い伊川瀬には、「源吾の堰」とその用水の恩恵をうける4ヘクタールの「新田」がある。これらは報徳仕法の事跡といわれている。



源吾の堰は、丸田を井げたに組んで、各所に杭を垂直に打ち込み、その間に30～50cmの石をつめて逆川の水を止め、新田用水に使用したものである。真岡市や今市市に存在する二宮堰と同じ構造をしていた。

源吾の堰は、丸田を井げたに組んで、各所に杭を垂直に打ち込み、その間に30～50cmの石をつめて逆川の水を止め、新田用水に使用したものである。真岡市や今市市に存在する二宮堰と同じ構造をしていた。

#### 9 無一物での一家離散？

— お田さんが亡くなったとき、金治郎の家には田畑も家財も何一つなくて、すぐさま一家離散になったのでしょうか？ —

『報徳記』にはそう書いてありますね。しかし、そうではありません。家には売り残りの農地が7反歩（70アール）ほどありました。ほとんどが水田です。耕作力さえあれば、なんとかやっつけていける規模です。苗代をつくって、さあ田植えだというときにお田さんが亡くなりましたから、とりあえず親類縁者の手助けで、田植えも草取りもやりました。金治郎ももう16歳。あと2～3年、こうして切り抜けられたら、あるいは一家離散をせずに済んだのかもしれない。

ところがその夏、又々大洪水があつて、金治郎の田んぼはすっかり流されました。「あるいは瀬となり、淵となり、又は砂入り、高台となり、一粒も実り申さず」と金治郎自身が書き残しているように、農地は全滅して、生活の基盤がなくなってしまったのです。

これでは仕方ありません。家も、わずかな家財・道具も、ぜんぶ売り払って、代金は万兵衛伯父さんが預かる。そして金治郎はそこへ、2人の弟は曾我別所村のお田さんの実家へと、別れ別れに引き取られて行ったわけです。

#### 10 2人の弟はその後どうした？

— その2人の弟のことですが、それから先どうなったのでしょうか？ 『報徳記』などには書いてないようですが。 —

上の弟の友吉は、金治郎と3つ違いで、このとき13歳でした。下の弟は富次郎（富治郎と書くのが本当でしょう）といって、このとき、わずか4歳でした。赤ん坊のとき、お田さんが西栢山の奥津家に預けたけれども、夜中に連れ戻しに行ったという、あの子が富次郎ですね。

お田さんの実家の川久保家では、太兵衛おじいさんが亡くなったばかりでしたが、おばあさんがこの孫たちを不憚に思って、世話を引き受けてくれました。金治郎も、よく小遣いを持って、会いに行きました。

富次郎はたいへん頭のいい子で、金治郎も楽しみにしていましたが、体が弱かったのでしょうか、9歳のとき病死しました。「今ごろあれが生きていたら、相当役に立ったのに」と、尊徳は後々までこれを惜しんだそうです。

友吉のほうは、尊徳に似た頑丈な体格に育って、本家の本家にあたる三郎左衛門家へ養子に入りました。はじめ常五郎、家督をついでから三郎左衛門と名を変え、明治10年、88歳まで長生きをしました。子孫は今でも栢山の里に住まれ、5代目の当主が二宮強さんです。

## 二宮尊徳 Q & A



# トピックス

## 二宮尊徳生誕200年記念映画

### 製作企画と取材の経過

- 59. 11. 11 報徳博物館において、小笠原清氏の出席を求め、製作方面・スケジュール等を検討。
- 59. 12. 18 第1回映画製作委員会を開き、製作計画等を検討。
- 60. 1. 29 第2回委員会を開き、尊徳の前半生の検討。
- 60. 3. 9 第3回委員会を開き、尊徳の後半生の検討。
- 60. 4. 4 第4回委員会を開き、関係者の出席を求めて、大日本報徳社製作無声劇映画「二宮金次郎(約50分)の参考試写。
- 60. 5. 9 第5回委員会を開き、上記映画および嶋沢作右衛門、豊田正作について検討。
- 60. 6. 4 第6回委員会を開き、相馬の仕法・富田高慶の業績・日光の仕法・北海道開拓・同報徳活動等について検討。
- 60. 11. 17~19 今市市・真岡市・二宮町および相馬方面の遺蹟視察。
- 61. 4. 17~19 相馬市・二宮町方面の取材。
- 61. 7. 11~13 相馬市方面取材の下見。(以下略)



今市報徳役所跡の二宮尊徳銅像

# 読者の広場

尊徳生誕200年記念としての映画口ケ地の紹介は、大変興味をもって読んでおります。ことに北海道方面の口ケ地である野付、士幌、豊頃などの町の状況と、現在生きている報徳運動が理解されました。写真は印象的で現地を連想させ、カラーであれば、なお良かったと思います。

これから紹介される報徳の仕法地も期待しています。この読者の広場を通じて、さまざまな知識や体験をお持ちになる方々の記事を拝読できる日を楽しみに待っています。

投稿を機会に申し上げたいのは、報徳関係特有の用語やキーワードの簡明な解説があれば、面白くてためになるのではないのでしょうか。

小田原城址の満開の桜花が散りゆく風景を見ながら、尊徳翁の「咲けば散り、散ればまた咲き、年ごとに、ながめつきせぬ

花の色々」の歌を思い出しました。世の中は大きく揺れ動いておりますが、尊徳翁の「増減は、器傾く水と見よ、こちらに増せばあちら減るなり」のように見つめたいと思います。小田原市 MK生

## 昭和62年度 友の会会員募集

報徳博物館を身近なものとして気軽に利用しよう。報徳のことをはじめ、歴史や文化をグループで学ぼう。楽しいサークル活動をしよう。そしてこの館を盛り立ててやろう……。

そういった方々に会員になっていただくという趣旨です。会員になりますと、①博物館招待券の贈呈(1年間有効) ②会報・パンフレット等の贈呈 ③研修室・講堂・閲覧室等の特別利用 ④館主催行事の案内 ⑤古文書等の受託管理、館売店の割引き利用、などの特典があります。

会費は個人会員年間3,000円・法人会員10,000円で、受付事務は博物館で行います。財団法人報徳福運社(郵便振替口座・横浜3-49044)に入会申込みの会費振込みをされますと、会員登録の上、会員証をお届けすることになっています。

## 報徳博物館友の会規則(抄)

1. この会は報徳博物館友の会という
2. この会の事務所は、小田原市南町1-5-72報徳博物館におく。
3. この会は、報徳博物館のすこやかな発展に協力し、身近な博物館に育てるとともに、これを活用して報徳の原理と方法をはじめ、わが国の歴史と文化をより深く、広く学ぶことを目的とする。
4. この会は、その目的を達するため次のことを行う。
  - (1)博物館への情報提供及び運営協力
  - (2)講座・講演会などの開催
  - (3)会員相互の研さん及び親ばく行事
  - (4)古文書等の寄託のあつせん

## 発行 財団法人報徳福運社 報徳博物館友の会

〒250 小田原市南町1-5-72  
電話0465(23)1151・振替横浜3-49044